

専門用語と和語動詞からみた経済記事の語彙

田丸 淑子

要旨

経済記事の語彙として名詞の中から専門用語を、動詞の中から和語動詞を取りあげ検討した。経済の分野の専門用語は理工系とは異なり、専門概念であっても、それをあらわす語彙そのものは、日常語が占める割合が大きいことが報告されている。新聞の経済・金融記事に用いられる動詞を調べたところ、一般的に日常的、卑俗的との印象を持たれている和語が漢語より多用されていることがわかった。和語動詞は専門分野の内容に関係なくどの分野でも共通して用いられ、専門的・抽象的な漢語名詞に伴って連語として用いられる場合が目立った。専門分野の記事を教材とする際には、専門用語や漢語を重視しがちである。しかし、それらの名詞を受けて文にする役割を果たす和語動詞にも十分な配慮がなされなければ、学習者の発話・運用能力の向上には結びつかない。

キーワード： 経済、新聞、専門用語、和語動詞、連語

1 はじめに

中・上級日本語学習者の中には、日本語を教育や研究の手段としてではなく、将来（または現在）の職業上の必要から学習している者も多い。彼等の多くは、国際関係や、経済、ビジネスを専攻しており、到達目標のひとつに日本の新聞や雑誌の経済・金融関係の記事を読みこなすことをあげる。また、経済記事を読むだけでなく、外国語で得た経済・金融の情報を日本語を使ってビジネスの場で活用したい、という希望も多い。筆者が担当している国際大学大学院の留学生はその一例といえる。つまり、彼等は専門の国際関係・国際経営は英語で学び、それに加えて、将来のキャリアに備えて日本語を学習している。

このような学習者に必要とされるのは、単に記事や文書の読解や日常会話の受け答えの能力だけではない。駒井(1990)が指摘するように、彼等には複雑な議論や説明のための、まとまった文章を作る能力が必要となる。そこで、筆者は新聞記事やニュースを素材として用い、学習者に経済・金融に関する情報を集める力と、その内容にふさわしい語彙や表現を用いて、発表・議論する力をつけることを目標とする授業を試みた。

経済記事を教材とするにあたって、筆者は、以下のように考えていた。

- ① 経済・金融などについて記事を読んだり討論したりするには、いわゆる専門用語の学習が重要。
- ② それら専門用語は初級や中級で主として学ぶ日常語彙とは異なる語彙群のはずだから、学生にとってはかなり難しいのではないか。従って、専門用語の学習にはかなり時間を配分する必要があるだろう。
- ③ 専門的、抽象的な概念を表すのは、主として漢語の名詞であるから、いかに漢字語彙が使いこなせるかが、目標達成のカギをにぎるのではないか。

この前提にたって実際に授業を行なってみた。授業は、新聞記事の読解、ラジオ・テレビのニュースの聴解、そしてまとめとして発表と討論を行なった。ところが、実際に授業

を進めてみると、特に語彙に関して筆者が事前に予想していたこととはかなり異なる現実
に遭遇した（田丸 1995、1998）。その主な点は、

- ① 専門用語と思われる語彙に重点をおいて授業を進めてみたが、実際の経済記事やニュースには、経済の分野を感じさせない、より一般的な語彙が骨組みとなって多数用いられており、学習者にとっては専門用語よりむしろそちらの学習が難しかった。
（例：合意、対応、還元、経済構造を転換する、市場原理を導入する、課税の対象となる、経営の健全性を維持する、公的資金注入を余儀なくされる、需要をまかないきれない）
- ② 経済の専門用語は、主に欧米から持ち込まれた概念の訳語がほとんどで、意味領域が限定されていて英語と一対一の対訳が可能である。そのため、専門知識を持ち、英語の理解できる学習者にとってはその用語の意味する概念の理解は問題がない。従って習得は一般語彙に比べて難しいものではなかった。（例：流動性、自己資本比率、優先株）
- ③ 「専門記事＝漢字語彙の世界」という予想に反して、かなりの数の和語動詞群が用いられており、それが、特に文章を作る場合に学習者にとって難しかった。

このような経験をして、経済記事が実際にどのように書かれているのか、語彙という視点から観察してみようと思い立った。新聞や雑誌の語彙使用については、既に国立国語研究所から大規模な報告が出ている（1962、1964、1970、1987）。しかし、それは経済の分野に限定されたものではない。また、個別の語彙の使用頻度という点では参考になるが、文の中での語彙の使われ方はそこからは探れない。そこで、手許にある先行研究と新聞記事で、次の点を調べることにした。

- ① 経済記事の専門用語は日常の語彙とかけ離れているのか。これは、筆者が経済記事に用いられる名詞の中でも「専門用語」というものを実際以上に難しく考えていたのではないか、という反省から出たものである。
- ② 記事の中で、専門用語や抽象概念をあらわす名詞を文章に組み立てていく際に、どのような動詞が、使われているのか。特に学習者にとって落とし穴だった和語動詞について見てみる。

なお、筆者がここで専門用語というのは、厳密な意味ではなく、日本語の教師として経済・金融の用語と判断したものである。

2 経済の専門用語

まず、経済学関係の語彙及び語彙教育に関する報告（小宮 1995、岡 1996、村田 1996）を見た。小宮は経済学の基本的専門語の特定、村田は四字漢語の構成成分の分析、岡は経済語彙の指導を目的にしているが、いずれも、経済の分野では専門的な概念を表す語彙であっても、語彙そのものは一般的な語と考えられるものが多いという点で一致している。

例えば、小宮は高校の教科書と経済関係の専門語辞書を対照して 799 語を取り出し、それらを概念上の専門性（中心概念／周辺概念）と語としての日常性（日常語／非日常語）という二つの切り口で「日常＝専門語（304 語）」「中心的専門語（133 語）」「周辺の専門語（362 語）」に三分類した上で、経済の基本的な専門語における日常語の重要性を指摘している。小宮は、日常性の判断基準として「日本語能力試験 1 級の語彙」を用いている。筆者が小宮の資料をもとに計算したところでは、日常語を成分として含まない語は全体の

13.4%に過ぎない¹⁾。

日常語と専門語の関係について岡(1996)は、日常語であってもそれが複合語となり経済用語として用いられた場合は、固有の概念を表すことがあるので、学習者の注意を喚起しなければならない(p. 25)と指摘している。

村田(1996)は留学生用の経済学入門教科書に出現する経済学の専門用語を対象として、四字漢語の構成成分を分析しているが、結果は、経済学の入門期の専門用語は新聞語彙対象の研究結果に近い結果が出ており、(経済としての)分野の特殊性は出ていない、としている。その理由として、村田は、経済学入門期の漢語専門用語の多くが、我々が日常マスメディアを通じて接しているものであること、現代社会の中で、非専門家が専門用語にさらされる機会が増えていることをあげている(p.93)。

このような専門用語と日常語の関係は、経済学だけのことではないようだ。23分野(論理学と図書館学以外はすべて理工系)の学術用語を分析した石井(1997)は、学術用語の語構成に「一般」の造語成分が重要な位置を占めていることを報告している。ただし、その比率は、人文系の論理学と図書館学に比べ理工系の諸分野は一般に低く、化学、歯学が格段に低い。つまり、専門用語でも分野によって日常語からの乖離が著しいものとそうでないものがあるということである。経済学はおそらく人文系と並んで、またはそれ以上に日常語に近いのではなかろうか。また、専門書ではなく新聞記事であれば、なおさらのことだろう。

ところで、これらの分析はどれも専門用語として文から切り離された語彙群について行われた分析なので、実際の経済記事や文献の中で専門用語がどのように用いられているのかをここからは知ることはできない。経済記事の語彙の実態を理解するには、例えば、名詞の中で専門用語がどの程度の割合を占めているのか、また非専門用語としてはどのような語彙が用いられているのか、その中にある傾向を示す語彙群があるのか、専門用語と非専門用語との関係で何か特徴的なことがあるのか、等は少なくとも知る必要があるだろう。

国立国語研究所の「専門語の諸問題」(1981)は、専門的な文献も基本的な骨組みは一般用語でできており、そこに専門的な用語がまじるのである(p.132)と指摘している。この認識は専門用語の用いられ方を考える上で示唆に富む。また、日本語の教材として専門記事を考える場合も同様である。経済記事を読んだりそれについて議論したりする上で、専門用語は避けて通れない。しかし、その用語があらわす概念が専門的であっても、語彙自体が日常性の高いものが多いのであれば、日本語の授業としては専門用語が出てくることを心配しすぎることはないのではないか。前項にも述べた通り、筆者は専門用語以外の部分の、記事や文献に一般的に用いられる語彙群が数も多く、学習者にとっては手強いものであったことを経験した。専門用語の周辺に、専門記事を特徴づける語彙があり、教師としてはそちらにも十分配慮することが必要だろう。

3 和語動詞の使用

3-1 資料

経済記事の学習で、和語動詞が学習者にとって予想外の落とし穴になったことから、筆者は専門記事や文書に用いられる和語動詞に関心をもった。学習者は、和語動詞が漢語や専門用語に比べ意味がおおまかなものが多く印象に残らないせいか、文章を作る際に必要な動詞が使えないことが多く苦労した。

文章に和語を使うか漢語を使うかという問題は、文章が扱っている話題、文体、個人差といった要素が絡んで、客観的に論ずることが難しい問題であるせいか、今まで殆ど調べられていないようだった。そこで、手始めに新聞の経済記事が実際にどのような動詞を使って書かれているのか、調べてみることにした。資料が少なすぎることは承知の上だが、それでも何か今後の調査の手がかりが得られはしないかと期待したからである。

資料として実際の新聞記事と新聞記事を素材にした日本語教科書を用いた。新聞記事は日本経済新聞の一面記事から4つ、社説から3つ、経済教室から3つの計10の記事を取り出した。一面記事は出来事の速報、社説は意見、「経済教室」はあるトピックについて学者や専門家が執筆する比較的長めの記事と、それぞれ記事の長さや性格が少しずつ異なる三分野から選んだ。教科書は、「外国人のための新聞の見方・読み方（KIT教材開発グループ編、凡人社）」の「政治」「国際・外交」「経済・金融」「産業」「労働」の課に採られている記事を用いた。ここでは、①文中に和語動詞がどのくらいの割合で使われているのか。②どんな和語動詞が使われているのか。③どのように使われているのか、に焦点をあてた。

3-2 和語動詞がどのくらい使われているのか

ここでは、日本経済新聞の記事を資料とした。国立国語研究所による新聞の語彙調査や雑誌九十種の用語調査にも報告されているが、和語動詞の中で、単独の「する」と「なる」、は「～とする」「～となる」「～になる」等の形で頻用されることがわかっていたので除外した。また補助動詞としても使用されるので「ある」、「いる」、「くる」、「いく」も除外した。それ以外の動詞を「漢語+する」「和語動詞」「混種語（音読み漢字一字+する：対する等）」に分けて、それぞれの出現比率を見ることにした。以下がその結果である。

① 一面記事

記事1 IDC買収提案 (約700字)	記事2 自己資本比率規制 (約850字)	記事3 日産への出資断念 (約1050字)	記事4 財形制度改革 (約600字)
延べ数 漢語 17 (48.6%) 和語 15 (42.9%) 混種 3 (8.9%)	延べ数 漢語 15 (46.9%) 和語 13 (40.6%) 混種 4 (12.5%)	延べ数 漢語 13 (38.2%) 和語 19 (55.9%) 混種 2 (5.9%)	延べ数 漢語 11 (40.7%) 和語 14 (51.9%) 混種 2 (7.4%)
異なり数 漢語 11 (42.3%) 和語 13 (50.0%) 混種 2 (7.7%)	異なり数 漢語 11 (40.7%) 和語 13 (48.1%) 混種 3 (11.1%)	異なり数 漢語 12 (42.9%) 和語 14 (50.0%) 混種 2 (7.1%)	異なり数 漢語 10 (41.7%) 和語 13 (54.2%) 混種 1 (4.2%)

② 社説

記事1 米国市場株価 (約1900字)	記事2 IMF対口融資 (約960字)	記事3 規制緩和委員会強化 (約1040字)
延べ数 漢語 17 (24.3%) 和語 50 (71.4%) 混種 3 (4.3%)	延べ数 漢語 15 (40.5%) 和語 20 (54.1%) 混種 2 (5.4%)	延べ数 漢語 13 (31.0%) 和語 28 (66.7%) 混種 1 (2.3%)
異なり数 漢語 17 (27.4%) 和語 42 (67.7%) 混種 3 (4.8%)	異なり数 漢語 12 (35.3%) 和語 20 (58.9%) 混種 2 (5.9%)	異なり数 漢語 11 (28.2%) 和語 27 (69.2%) 混種 1 (2.5%)

③ 経済教室

記事1 市場機能とリスク (約 3700 字)	記事2 環境会計 (約 2600 字)	記事3 展望ユーロ経済 (約 3600 字)
延べ数 漢語 39 (28.9%) 和語 90 (66.7%) 混種 4 (3.0%)	延べ数 漢語 45 (37.2%) 和語 73 (60.3%) 混種 3 (2.5%)	延べ数 漢語 67 (60.0%) 和語 66 (49.3%) 混種 1 (0.7%)
異なり数 漢語 33 (32.0%) 和語 65 (63.1%) 混種 3 (2.9%)	異なり数 漢語 27 (32.5%) 和語 53 (63.9%) 混種 3 (3.6%)	異なり数 漢語 43 (43.0%) 和語 56 (56.0%) 混種 1 (1.0%)

これだけの資料から一般化することは難しいが、この結果を見ると、

- ① 異なり語数ではすべての記事で和語の比率が高い。「漢語+する」の比率が高かったのは一面記事1、2と経済教室3の延べ語数の場合だけであつた。それは、比較的短い一面記事では、記事1で「漢語+する」延べ17語のうち「提示する」が6回使用されていたため、記事2では延べ15語のうち、「計上する」が3回、「合意する」「公表する」が2回使用されていたことが影響しているのではないかと考えられる。
- ② 経済記事3を除くと、一面記事では「漢語+する」と和語動詞出現の差はあまり大きくないが、社説や経済教室では差が大きくなっていることが目立つ。これは、記事の長さによるのか、社説や経済教室などの記事の性質によるものなのか、これだけの資料からは判断できない。

50～60%が多いか少ないかは、他の分野での使用状況とも比べた上でなければ論じられない。しかし、従来、「日常的、話し言葉、俗的」とされている和語であるが(武部 1989、玉村 1989)、実際には、少なくとも動詞に限っては、専門的な経済・金融の記事で多用されていることがわかった。参考のために新聞以外に経済の報告文献(アジア経済研究所トピックレポート²⁾)に当たってみた。出現数は数えなかったが、この種の文献でも和語動詞は「漢語+する」よりも多く使われているという印象を受けた。

3-3 どんな和語動詞が使われるのか

3-3-1 教科書の場合

まず、教科書「外国人のための新聞の見方・読み方」の「政治」「国際・外交」「経済・金融」「産業」「労働」の課に採られている記事の中から和語動詞を拾い出してみた。前述の和語動詞比率の場合と同様、「する」、「なる」、「ある」、「いる」、「くる」、「いく」は除外した。これらの記事はすべて記事の断片なので、出現度数にはあまり意味がないと思い、度数は正確に数えなかったが、次の和語動詞がよく使われていた。

上げる、上がる、集まる、いう、受ける、選ぶ、おこなう、思う、およぼす、抱える、かける、決まる、決める、超える、示す、占める、進む、進める、迫る、高まる、強まる、通じる、ともなう、取る、のびる、入る、図る、始まる、始める、果たす、開く、減る、守る、結ぶ、めぐる、持つ、基づく、分ける

教科書から拾った異なり数は、191語になった。これらの和語動詞が基本的な語彙なの

かどうか見るために、岡（1994）が基準として用いた国立国語研究所「日本語教育のための基本語彙調査」（1984）の基本 2000 語レベル、基本 6000 語レベル及びそれ以外に分けてみた。191 語中約 3 分の 2 にあたる 128 語が基本語彙 2000 語に含まれるものであった。

基本 2000 語に含まれないもので、6000 語レベルのものは次の語彙であった。

あふれる、改める、抱く、至る、失う、得る、応じる、襲う、訪れる、抱える、
かわる、固める、構える、超す、異なる、探る、支える、強いる、親しむ、
占める、生じる、迫る、備える、耐える、高まる、高める、保つ、通じる、
告げる、憤む、つまずく、伴う、取り扱う、にらむ、狙う、図る、はずれる、
ぶつかる、誇る、任せる、めざす、目立つ、基づく、寄せる（以上 45 語）

また、基本語彙に含まれないものは、以下であった。

おびやかす、囲う、絡む、交わす、さしかかる、しく、絶つ、たどる、とどめる、
担う、果たす、はらむ、控える、率いる、踏み切る、隔たる、まかなう、めぐる
（以上 18 語）

3-3-2 日本経済の記事から

同様の分類を上述の日本経済新聞の 10 の記事について行なった。その結果、和語動詞は、延べ数 393 語、異なり数 198 語であった。

まず、出現回数の多い語は、以下の通りである。（ ）内は出現回数

10 回以上：始める(11)

9～6 回： 考える(9)、進む(9)、進める(9)、持つ(7)、迫る(7)、見る(6)、生まれる(6)、
伴う(6)

5～3 回： 示す(5)、言う(5)、急ぐ(5)、増える(5)、分ける(5)、あわせる(4)、かえる(4)、
取る(4)、広がる(4)、求める(4)、促がす(4)、比べる(4)、こえる(4)、支える
(4)、目指す(4)、及ぶ(3)、加える(3)、備える(3)、つける(3)、整える(3)、
流れる(3)、除く(3)、望む(3)、見える(3)、向ける(3)、与える(3)、選ぶ(3)、
陥る(3)、知る(3)、耐える(3)、広げる、認める(3)、基づく(3)

次に、2 つ以上の記事に使われた語をひろってみる。

6 つの記事： 考える

5 つの記事： 進む、示す、持つ

4 つの記事： あわせる、いう、代える、進める、取る、始める、広がる、見る、求める

3 つの記事： 急ぐ、促す**、生まれる、及ぶ*、限る、比べる、加える、超える、支える*、
迫る*、備える*、つける、整える、伴う*、流れる、除く*、望む、増える、
見える、向ける、目指す*

2 つの記事： あげる、与える、受ける、失う、移す、選ぶ、得る、おくれる、陥る、重ねる、
決める、溯る、下がる、知る、耐える、高まる、高める、続く、出る、取り組
む、並ぶ、のぼる、入る、始まる、果たす、広げる、増す、まとめる、認める、
向かう、めぐる、基づく、揺らぐ、分ける

（無印は 2000 語に、* は 6000 語に含まれる語で、** は基本語以外の語）

以上の和語動詞の中には、経済・金融の分野性を感じさせる語は一つもない。参考のために、農学系学術雑誌の語彙を分析した村岡他（1995、1997）の報告を見てみよう。村岡他は、ある限られた語彙群が高頻度で用いられる傾向があり、それらの語彙は農学系の

どの下位分野でも共通に必要とされる語彙であると指摘している。さらに、この報告にあげられている出現頻度 10 回以上の動詞 170 語（和語動詞 65、漢語・外来語＋する 102、混種語 3）中の和語動詞は以下の通りである。

400 以上：なる、示す

300～399：する、行なう

200～299：考える、認める、ある、用いる

100～199：見る、比べる、得る

50～99：異なる、伴う、調べる、求める、及ぼす、含む、思う、生じる、受ける、持つ、

30～49：わかる、できる、起こる、表す、与える、よる、述べる、除く、加える、知る、置く、いう

10～29：分ける、入れる、占める、従う、試みる、離れる、かかわる、越える、現われる、通じる、とる、取る、見出す、わたる、選ぶ、抑える、劣る、基づく、高める、覆う、保つ、つける、通す、なす、限る、呼ぶ、至る、設ける、遅れる、変わる、かける、含める、湿る

村岡他(1997)は前述のように、これらの語彙が農学系のどの下位分野でも共通に必要とされている語彙であると指摘しているが、この中から「湿る」だけを除けば、農学に限らず、経済・金融、そしておそらくどの専門分野の記事や文献にも共通の語彙であると言えるのではない。

以上の教科書、日本経済新聞の記事、そして村岡他の三つの資料から、次のことが言えるのではない。

- ① 専門記事や文献に用いられる和語動詞は、分野には殆ど制約されていない。
- ② 村岡他(1997)は、農学の動詞（漢語＋する、外来語＋する、和語）の使用調査を踏まえて、加納(1990)が提案する「専門書に共通するとみなされる動詞群を「中間動詞」と呼び、ある特定分野にしか使用されないような特殊の動詞のみを「専門動詞」と呼んで区別する」(p.43)を支持している。本稿の経済記事の分析からも、加納の指摘は妥当と考えられる。なお、和語動詞については、殆どがこの「中間動詞」に属することになるのではなかろうか。
- ③ ここでは、特に和語動詞に焦点をあてたが、日本経済新聞の記事については、「漢語＋する」の動詞も調べてみた。「漢語＋する」動詞は延べ語数 252 語、異なり語数 156 語であったが、この中で、経済・金融の分野性をあらわしているとみなされる語は、「計上する」「課税する」「算出する」「算定する」「出資する」「節約する」「投資する」「買収する」「返済する」「民営化する」「融資する」「解約する」の 12 語であった。村岡他(1997)の場合でも、農学の分野性をあらわす「漢語＋する」型の動詞は 102 語中 22 語と和語の場合より多い。二つの結果をあわせてみると、和語動詞よりも、「漢語＋する」型の動詞の方が専門性を示す可能性があるが、どちらにしても、動詞は専門性、分野性を担うものは多くないこと（つまり上記③の「中間動詞」の類が多いこと）ことがわかる。
- ④ さらに、個々の和語動詞を見てみると、基本語かどうかということとはまた別に、i) 日常的な話題にも用いられて、くだけた会話でも使われうるもの。ii) あまり日常生活の話題には使われず、抽象的・専門的な話題について用いられ、口頭でも文書でもややあらたまった調子の文章に用いられるもの、とに分けられる。前者の代表的なものとしては、思う、考える、進む、言う、受ける、とる、くらべる、等があり、後者の

ものとしては、与える、改める、歩む、表す、當む、失う、謳う、促がす、おちいる、及ぼす、加える、異なる、示す、整える、伴う、担う、述べる、図る、率いる、経る、見出す、めぐる、基づく、用いる、和らげる などがあげられる。従って、この点からも和語をひとくくりに「日常的、卑俗的」とすることには問題があるろう。

3-4 和語動詞はどのように使われているのか

3-4-1 分類

和語動詞の用いられ方は、以下のように分類できるだろう。

- ① 意味がはっきりしていて、いろいろな名詞と比較的自由につながるもの。ここには出現頻度の高い和語動詞が含まれる。例：始める、考える、進める、決める、比べる、認める、求める、急ぐ
- ② 専門記事や文書に特徴的な語で、対応する漢語がないか、ほとんど用いられないもの。限られた語が高頻度で用いられる。例：含む、伴う、加える、支える、除く、巡る、基づく、こえる
なお、この類には、混種語（音読み漢字一字＋する／ずる）として和語とは区別した語彙群が含まれる。例：対する、属する、関する、要する、応じる、通じる、転じる、報じる
- ③ 慣用句的な表現の一部として用いられる語。これらの慣用句は新聞記事には多様されている。例：水をあける、歩調を合わせる、拍車をかける、頭を抱える、避けて通れない、薄日がさす、水をさす、あとを絶たない、一途をたどる、弾みがつく、肩を並べる、波に乗る、複雑多岐にわたる、裏目に出る、歯止めをかける
- ④ 専門・抽象概念をあらわす名詞と連語の関係にある語：つまり、ある概念をあらわす漢語（または外来語）を使うと、その受けとめ役としてこれらの和語動詞が付随して出現するということである。例：影響を及ぼす、深刻に受け止める、合意を得る、構想を打ち出す、信用を落とす、課題を抱える、困難を抱える、圧力をかける、方向を探る、過半数を占める、命令を出す、改革を迫る、発展に努める、改革に取り組む、技術を取り入れる、均衡をとる、政策をとる、責任を担う、勢力を伸ばす、軌道に乗る、発展を図る、役割を果たす、協定を結ぶ、イニシアティブをとる、対応を求める、議論を重ねる、批判にさらされる、念頭におく、条件をつける、コストがかかる、印象を与える

以上の和語の使われ方の中では、④の連語としての使用が目立った。①と④のちがいは、①の和語動詞が比較的是っきりした意味をもっているのに対して、④の方は、単独では意味があいまいで、名詞と組み合わせられることではじめて具体的な意味を持つようになるという場合が多い（例：圧力をかける、成功を収める、均衡をとる等）。この名詞と動詞の連語関係は緊密なので、名詞が出てくれば和語動詞が出現する機会が生まれることになる。それも、和語動詞が多く用いられる要因になるのであろう。

3-3-2 和語動詞を選ぶか、「漢語＋する」を選ぶか

これは筆者にとって最も関心のある点であるが、この問いにはおそらく答えがあったとしても簡単には出ないだろう。しかし、これだけの限られた資料であるが次のような興味深い点を見つけた。

- ① 「和語、漢語のどちらを選ぶか」ということは「名詞＋を」に後続する動詞を和語動詞

にするか、それともそれに意味的に対応する「漢語＋する」にするか（例：事件を調べる／調査する、事業を上げる／拡大する）の選択と考えていたが、実際にはそれ以外に、次のような選択が多いことに気づいた。それは、

中国と交渉する／中国との交渉を進める、アジア経済に影響する／アジア経済に影響を及ぼす、インフレを懸念する／インフレへの懸念を高める、民営化について議論する／民営化についての議論を進める、投資を管理する／投資の管理を行なう、方針を修正する／方針に修正を加える、等である。

これらの例が示しているのは、意味的に対応する「和語動詞」対「漢語＋する」の対立のほかに、「漢語名詞＋する」対「漢語名詞＋を＋する以外の和語動詞」という対立もあるということである。意味的には「交渉する」も「交渉を進める」も殆ど変わらない。強いて言えば、「交渉を進める」の方がよりこなれた表現とも言えるかもしれない。実際、新聞記事や文献にはこの類の表現が目立つ。しかし、これを用いるのは単に語感だけの問題ではなさそうだ。漢語部分を名詞として保てば、その前に大きな修飾部分をもってくるのが可能になる。そのためにこの形が選ばれるのではない。

- ② 上記①とも関連するが、経済記事や文献には連体修飾で名詞句を拡大する傾向があるようだ。拡大された名詞句の核となる被修飾名詞は、当然、和語動詞とも「漢語＋する」とも結びつく可能性がある。それが漢語名詞の場合、漢語・和語のバランスをとる意味と、前述の連語の関係で和語動詞が用いられる傾向があるのではないかと期待して調べてみたところ次のような例が見つかった。

「国内の設備投資の削減（を促す）」「経営への参画ができる優先株の取得（を促す）」「比較可能な基準の確立（が望まれる）」「リスク管理の構築が遅れる銀行の淘汰（が進む）」

しかし例が少なすぎるので、実際にこのような傾向があるのかどうかを見ることはできなかった。しかし、和語動詞を選ぶか「漢語＋する」を選ぶかという問題は、単に語感の問題だけでなく、文の構造も関係しているのではないかと、ということがうかがえた。

3-5 まとめ

以上はごく限られた資料を観察した結果であるが、それでも以下の点は言えるだろう。

- ① 経済記事や文献には動詞として和語が多く用いられている。
- ② その中には、主として専門的・抽象的な語彙と共に、記事、文献、またはあらたまった発言で用いられる数の限られた和語動詞があり、それらは分野に制約されずに高頻度で用いられる。
- ③ 従って、和語をひとくくりにして「日常的、卑俗的」とするのは適切とは言えない。
- ④ 文から切り離れた個々の語彙を扱うだけでは、その特徴を見ることはできない。語彙は文の中で、他の構成要素とのつながりを調べた上で論じる必要がある。特に和語動詞は連語として名詞との結びつきを把握した上で論ずることが不可欠である。
- ⑤ 今まで行われている和語の造語力や専門語としての和語の位置に関する報告は、範囲を一語内に限定しているが（斎藤 1992、玉村 1989、梶原 1989）、範囲を広げて助詞を含めた複数語のかたまりとしてとり上げて分析してみると、和語に関してより多くの情報を得ることができるのではないだろうか。
- ⑥ 新聞記事の文章で和語動詞を選ぶか、「漢語＋する」を選ぶかには、語感だけではな

く構文の影響もあるのではないか。

- ⑦ 実際に語彙がどのように使用されているのか、もっと情報を得るために、単なる語彙調査ではなく、大規模なデータベースの構築がのぞまれる。データベースができれば、今まであまり着手されていない語彙使用の質的な分析への手がかりも得られるだろう。

4 日本語教育への提案

専門用語と和語動詞について検討してきたが、これに基づいて日本語教育にどのような提案ができるか考えてみたい。

- ① まず、専門分野の日本語教育に対してもっと柔軟な取り組みができるのではないか。現在、日常的な日本語をまずおさえ、専門分野の日本語に入るのは中級後期からというのが一般的だが、その理由のひとつは専門用語が一般的でないという判断があるのではないか。しかし本稿でも見たように、理工系と人文・社会科学系では専門用語と一般的な語彙との乖離は大きな差がある。社会科学系の専門用語に含まれる日常語成分に着目すれば、もっと早い時期に専門的な話題を取り入れることはできないだろうか。漢字とのかねあい、専門知識の有無など考慮しなければならない点があるのも事実である。しかし名称が矛盾するようだが、日常語といっても、会話や日常的な話題を扱ってはいは出てこない、専門的・抽象的な文章にしかでてこない日常語も多い(例：関する、伴う、含む、対象)。学習者にとってはおそらくこの種の語彙の方が、専門用語より教師の手助けを必要とするのではなかろうか。また、仁科(1997)も指摘しているように、専門知識を有しているか否か等学習者の背景によって、専門用語の負担度も異なる。これらを考慮し、専門用語にあまりこだわらずに、学習者が必要としている専門分野の日本語教育は、できるだけ早く始め、それだけ長い期間教師が支援できるようにしたほうがよいのではなかろうか。
- ② 語彙は連語など、他の語彙との関連を強調して指導すべきである。そして和語動詞を軽視しないこと。授業では漢字の学習ということもあつて、漢字語彙が強調されがちである。その結果、名詞は適切なものが選べても、それを受ける動詞が使えずに文が締めくくれない、という学習者が多い。特に漢字系学習者は上級になればなるほど漢字語彙に依存するようになり、読解はなんとかこなす。しかし説明や議論のために専門的な内容の文を作ることになると、高度に専門的な漢語を連続して長い名詞句を作るが、それをしっかり受け止める動詞が使えず、文として完成しない。これを防ぐためにも、名詞と動詞の繋がりを強調しなければならない。特に、意味が広くあいまいな和語動詞はその必要がある。

日本語教育では、語彙は伝統的に文型・表現ほど重視されずに学習者個人に任されることが多い。そのため、語彙は提示されてもなかなか定着せず、使用語彙とし活用できるまでになるには至らない。この状況を改善するためには、系統だった語彙指導が必要である。より効果的で説得力のある語彙指導の方法を作り上げるために、先にも述べたが、現実の文章の中で語彙がどのように連携しながら機能しているのかを観察することのできるデータベースの構築が望まれる。

註

1. 小宮は概念上の専門性の判断基準としてゴシック表記または索引掲載の有無を用いているが、その結果、小宮が経済の専門語として採用した語には、会社、郵便局、見通し、不可欠、住宅、環境、果実、ガス、テレビジョン、たばこ、ヨーロッパ、洋服、灰、等までが含まれる。専門用語に日常語が多いとする小宮の結論は、この専門用語の判断基準が影響している部分もあるかもしれない。
2. 国宗浩三編「アジア経済危機 マクロ不均衡・資本流出・金融危機と対応の問題点」(アジア経済研究所、1998)の第一、二、五、七、終章を参考にした。

参考文献

- 石井 正彦 (1997)「専門用語の語構成 —学術用語の組み立てに一般語成分が活躍する—」『日本語学』16(2): 21-30 明治書院.
- 加納 千恵子 (1990)「専門書を読むための読解指導について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』6: 35-53.
- 梶原 滉太郎 (1989)「専門用語と和語」『日本語学』8(10): 36-44 明治書院.
- 駒井 明 (1990)「上級の日本語教育」『日本語教育』71: 1-15.
- 小宮 千鶴子 (1995)「専門日本語教育の専門語—経済の基本的な専門語の特定をめざして—」『日本語教育』86: 81-92.
- 村岡 貴子他 (1995)「農学系学術雑誌の語彙調査 —専門分野別日本語教育の観点から—」『日本語教育』85: 80-89.
- (1997)「農学系8学術雑誌における日本語論文の語彙調査」『日本語教育』95: 61-72.
- 村田 年 (1996)「経済学専門用語四字漢語の語構成—専門分野導入期の日本語教育の方法を探索—」『日本語教育』91: 84-95.
- 仁科 喜久子 (1997)「日本語教育における専門語の扱い」『日本語学』16(2): 60-69 明治書院.
- 岡 益巳 (1994)「経済学部留学生のための経済用語の指導について」『日本語教育』82: 23-33.
- 斎藤 倫明 (1992)「和語の造語力」『日本語学』11(5): 25-34 明治書院.
- 武部 良明 (1989)「ことばの言い換えにおける和語と漢語」『日本語学』8(10): 21-27 明治書院.
- 玉村 文郎 (1989)「和語の位置」『日本語学』8(10): 4-13 明治書院.
- 田丸 淑子 (1995)「非漢字系学習者に対する中・上級の語彙指導」*Working Papers* 6: 102-110. 国際大学.
- (1998)「語彙に焦点をあてた授業 —非漢字系中級中・後期日本語学習者の場合—」*Working Papers* 9: 78-87. 国際大学.
- 国立国語研究所 (1962)『現代雑誌九十種の用語用字 (I) 総記および語彙表』(国立国語研究所報告 21) 秀英出版.

国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字（III）分析』（国立国語研究所報告 25）秀英出版。

国立国語研究所（1970）『電子計算機による新聞の語彙調査（II）』（国立国語研究所報告 38）秀英出版。

国立国語研究所（1981）『専門語の諸問題』（国立国語研究所報告 68）秀英出版。

国立国語研究所（1984）『日本語教育のための基本語彙調査』（国立国語研究所報告 78）秀英出版。

国立国語研究所（1987）『雑誌用語の変遷』（国立国語研究所報告 89）秀英出版。